



新・日本の街路樹 100 景「マキノメタセコイヤ並木」 滋賀県高島市マキノ町

カタカナ表記日本初であるマキノ町に、1981 年（昭和 56 年）マキノ町果樹生産組合が国内ではまだ珍しいメタセコイヤを防風林として 1.8 km（440 本）を植栽し、翌年続く県道にも地元が植栽を行い、総延長 2.4 km（東京駅～秋葉原駅間と同じ）、約 500 本に及ぶメタセコイヤ並木が完成した。

植栽時、樹高 2 m 程度の苗木が、樹高は約 25 m、幹周 1.8 m 位までに育ち、道路が貫通したことから、果樹園の防風林が街路樹（並木）となった特殊な例ですが、春の新緑、夏の木陰、秋の紅葉、冬の落葉。四季それぞれに雄大な姿を誇示し、左右の樹木の枝が重なり長い緑のトンネルとなっています。1994 年には読売新聞社の「新・日本の街路樹百景」に選定され、以後、CM やドラマ等で紹介もされ多くの観光客が訪れています。

落ち葉や台風による倒木、オーバーツーリズム等の問題も発生していますが、地元住民や周辺関係団体の理解と協力で自然樹形のまままで維持管理されています。



令和 8 年の年頭にあたって



一般社団法人日本造園建設業協会
会長 和田 新也

令和 8 年のお正月を、皆様方におかれましては健やかにお迎えのことと、心よりお慶び申し上げます。

旧年中は、協会の諸活動に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、国内外で自然災害や気候変動の影響が一段と顕著となり、豪雨や猛暑、台風などが生活や社会基盤に大きな影響を及ぼしました。地球規模で進む気候変動は、私たち造園業にとっても避けて通れない課題であり、「みどりの力」を生かした環境づくりの重要性がこれまで以上に高まっております。

また、資材価格の高騰や人材不足、労働環境の改善など、業界を取り巻く環境も依然として厳しい状況が続く、協会運営においても難しい問題が山積した一年でした。

こうした中、日造協では、各種委員会や講習会を通じ資格制度の運用や建設キャリアアップシステムの活用を図り、働き方改革の推進に取り組むと共に、関係機関と協議を重ねよりオーソライズされた、樹上安全作業マニュアルの発刊を通じ、労働安全の改善を目指してまいりました。さらに昨年 12 月には建設業法改正に伴い標準労務費が導入され、適正な施工体制の確保や働き手の処遇改善に向けた環境整備が一層進む契機となりました。

私達は造園の専門性を活かし、国が掲げる「持続可能で安心できる地域づくり」に貢献できる

よう、協会としても行政や関係団体との連携を一層強化してまいりたいと考えております。

そしてなんとこれも本年は、2027 年横浜で開催される「2027 年国際園芸博覧会（GREEN×EXPO 2027）」に向けた準備が本格化する、極めて重要な一年でもあります。開幕まで 500 日を切り、日本政府出展の起工式も昨年 11 月に執り行われるなど、いよいよ開催に向けた機運が高まっております。

この博覧会は、造園の魅力や技術の価値、そして「みどりの持つ力」を国内外に発信する絶好の機会であり、私たち造園業界にとって大きなビジネスチャンスとなります。

本年は千支の「午（うま）」の年であります。馬は古来より、人とともに働き、道を切り拓いてきた存在であり、「力」「誠実」「前進」の象徴とされており、勢いよく駆けその姿は、困難を恐れず、確かな志をもって未来へ進む力強さを私たちに示しています。

昨年は、副会長の田丸敬三氏のご逝去という、大変残念な出来事がありました。が、会員が力を合わせ、次代へと向かう一年としたいと存じます。これまで積み重ねてきた努力を礎に、新たな挑戦へと踏み出す一年といたしましょう。

結びに、会員の皆様のご健勝とご多幸、そして造園業界のさらなる飛躍を心より祈念申し上げます。新年のごあいさつとさせていただきます。

2026年
新春座談会

2027年国際園芸博覧会にかける思い

2027国際園芸博覧会が2027年3月19日～9月26日までの6カ月間、神奈川県横浜市で開催されます。この園芸博は造園・園芸業界にとって大きな節目となるものであり、日造協をはじめ、会員の方々も多数出展されます。こうした中、本日は5名の方々にお集まりいただき、出展への思いや参加への期待、さらに園芸博を契機とした今後の業界の展望について、語っていただければと思います。（座談会冒頭、趣旨説明より）

座談会出席者

岩井 雅彦 氏	神奈川県支部支部長、サカタのタネグリーンサービス(株)
古積 昇 氏	東北総支部総支部長、古積造園土木(株)
鈴木 元弘 氏	(株)鈴鍵
中村 和晴 氏	内山緑地建設(株)
和田 新也 氏	(一社)日本造園建設業協会 会長、箱根植木(株)
司会 伊藤 康行 氏	(一社)日本造園建設業協会 専務理事
オブザーバー 成家 岳 氏	(一社)日本造園建設業協会 広報活動部会部会長

出展のきっかけ

司会 最初に出展のきっかけ、和田会長には国際園芸家協会（AIPH）との関わりをお話いただければと思います。

和田 AIPHとの関わりは1985年からです。国際園芸博覧会については国際博覧会条約でAIPHの承認を受けたものをBIE（博覧会国際事務局）が追認することとなっているため、1990年の大阪花博誘致に際し、日造協がAIPHに加盟申請を行うとともに開催承認を申請しました。当時先代の和田貞次が日造協の会長職にあり、私はサポートとしてAIPHの会議に参加したのが始まりです。

アジアで初のAIPHメンバーとなり、加盟後父の和田、横溝氏、そして私が副会長とアジア代表を務め、その後私が園芸博覧会委員会の委員長兼務となり、AIPH活動に従事しました。

古積 3年前に開催された第40回全国都市緑化仙台フェアのガーデンコンテストに東北6県で出展したのがきっかけです。県を跨いだ参加でしたが、開催後は、「大変だった」より、「普段は別々に仕事をしている仲間達と一緒に庭づくりができて良かった」「ほかの人の仕事をみることができて良かった」など、嬉しい言葉でした。こうした流れで翌年の東北総支部総会で2027年国際園芸博覧会の出展を提案したところ、各県支部長から承認をいただき現在に至っております。

岩井 私たち神奈川県支部の地元は、第



和田 新也 氏

41回全国都市緑化かわさきフェアを令和6年秋、令和7年春に開催したばかりで、今度は園芸博のホストとしていろいろな役割が出てくると思っています。

今回の国際園芸博覧会は、AIPHの承認およびBIEの認定を受ける最上位（A1クラス）の国際的イベントなので、世界から訪れる方々を私たちがどうお迎えするかも大変ですが、自ら出展もするので、頑張らなければならないと思っています。

鈴木 2015年の第32回全国都市緑化あいちフェアに初出展し、こうしたイベントへの出展は2回目になります。

社員と一緒に頑張ってつくった作品を世界の人に見ていただき、どんな評価をいただけるのか、すごく楽しみです、せっかくの出展なので多くの方に私たちの思いを伝えたいと考えています。

また、出展で社員のモチベーションも上がるので、みんなで楽しい作品をどうつくるか、いろいろ計画中です。

愛知県からは複数社出展されますが、今回の座談会に都合がつかなかったということで弊社がその分何か伝えることができればと思っています。

中村 園芸博に出展する機会はなかなかないので、当社は若手社員に経験してもらうことを目的に2区画を申込み、結果として広めの1区画で出展することになりました。私は出展には直接関わらず若手社員へアドバイスをする立場ですが、当社が英国のチェルシーフラワーショウに出展した際のメンバーだったこともあって、今回の座談会に参加させていただきました。

園芸博にかける思い

司会 「園芸博にかける思い」、和田会長には、園芸博の経緯や今日的意義などをお話いただけたらと思います。

和田 AIPH認証の園芸博覧会は多様ですが、現在に体系的につながるのは1960年のロッテルダムが第1号です。日本国としては1984年のリバプールが初参加でした。それまでミュンヘンでも日本庭園がありましたが、政府出展ではありませんでした。

A1(BIEの認定を得る最大級の園芸博)

の国際園芸博覧会は、リバプール、大阪、ズータメア、シュトゥットガルト、昆明、ハールレマミア、ロストック、チェンマイ、フェンロー、アンタルヤ、北京、アルメーレ、ドーハ、横浜という流れで、シュトゥットガルトとドーハ以外は審査員等様々な形でプロジェクトに関係し、AIPHの活動の為年間90日以上出張した年もありました。

こうした中で、園芸博の歴史をみると、大阪花博は大きな転機でした。それまで

ヨーロッパのものだった園芸博が、以降アジアで盛んに開催されるようになり、さらに、大阪で掲げたテーマ「人と自然との共生」はそれまで花の美しさや園芸産業の紹介的だったものと異なり、社会における緑、環境の重要性を発信し、街づくり、コミュニティづくりを目指したものでした。

しかし、残念ながら、近年ドイツ、オランダの園芸博覧会は衰退しており、フロリアードですら休止という状況で、ヨーロッパでは非常に衰退気味です。

これは時代のニーズには合致しているはずの「みどり」ですが、見せ方、訴え方が時代遅れになったのかもしれませんが。そういう中で、大阪花博が園芸博の歴史を変えたように、横浜でまた園芸博の歴史を変えないと、園芸博覧会はそのまま衰退していってしまうかもしれません。

今、中国も元気がなく、園芸博覧会の開催回数が減り、そういう意味でも横浜への期待は大変大きくなっています。

今回の園芸博は、テーマがwell-beingやグリーンインフラの実装と言った、世界の関心事項に焦点を当てているので、あとはそれが具現化できるかどうか、来てくださった方々に伝えられるかがポイントだと思っています。

古積 2011年の「東日本大震災」では、全国の皆様から温かいご支援をいただきました。

園芸博の機会に、東北の復興の歩みといまの東北の魅力を庭で表現し、お返しできればと考えております。具体的には、東北6県の地図を描き、東北の植生がわかるような植栽と東北のお祭りを組み合わせ、五感で東北を体験できる空間づくりを目指しています。

外周は回廊をつくり、各県の自然環境や観光紹介、県産材で作った長ベンチを設置し、休憩場所としての利用も考えています。また、期間中の猛暑にも対応し、遮光ネットや、ミストを設置し、快適な空間にできればと思っています。

岩井 昨年の横浜市民へのアンケートでは、GREEN×EXPO 2027の認知度は低い状況であったと聞いております。

横浜では、ラッピングバスを走らせたり、いたるところにGREEN×EXPO 2027のポスターが貼ってありますが、「GREEN×EXPO 2027」が中心になっているので、これが万博ということがなかなか認識できないということもあるのではないかと考えています。これからは、大阪・関西万博の盛況も受けて、「次の万博は横浜だ!!」というスローガンも発信し始めていますので、今後の機運醸成で、園芸博を知っていただくのが一番の課題と考えております。

神奈川県支部は現在59社で、横浜の会社はもう仕事をしているのでよく分かっていますが、横浜以外の会社では、会場の上瀬谷ってどこ？という人もお

り、県造協になると会員は500社を超え、造園の仲間にもまず、分かってもらいたいと思います。

また、サカタのタネ自体の出展もありますが、サカタのタネグリーンサービスは、神奈川県の出展にも関わっておりますので、オール神奈川で対応したいと考えております。また、県内各市の方も出展参画を得て盛り上げようという話もあります。

鈴木 私たちが展示するのはビオトープです。ひと昔前のように何千万円をかけて日本庭園をつくって欲しいという方はおらず、生活様式も変わりました。個人の庭自体の仕事も減っていて、一時ブームになったイングリッシュガーデンも、最近は衰退して、粗放になった庭を何とかしてほしいというお客様もいます。

こうした中で、私たちが提案するのは「Precious Nature」。尊い自然というテーマです。子供たちにとっての自然とは何かを考え、1989年からビオトープに取り組んできました。

特に学校ビオトープを多く手掛け、子供たちから感想文などをいただく中で、子供たちにとっての自然は、遠くにある大きな自然ではなく、身近にある自然だと感じました。そして、同時にそれが一番大事だということも分かりました。

小学4年生の女の子からは「今まで教室の中でしか遊んだことがなく、ビオトープができて、何だろうと思って行ってみると、とても楽しくてしょうがなくなりました。私はビオトープが大好きです」という感想文をいただきました。

自然と関わることで元気になる。ビオトープの魅力を再認識しました。

ですから、私たちは未来の子供たちにどんな自然を残していくかがとても大事で、地球環境問題がクローズアップされ、生物多様性が注目される今が造園業界のビジネスチャンスだと思っています。

河川法の改正により、河川環境の考え方が変わり、これまで河川土木といった造園業ができなかった分野において、愛知県でも造園業が入札に参加、受注できるようになりました。

そのほか、都市緑地法の改正によるTSUNAG認定や生物多様性増進活動促進法など、民間企業に対しての国の働きかけも強まり、業界にとってのチャンスです。こうしたことも踏まえて、今回の出展で提案できたらと思っています。

中村 当社の社長方針の中に「資本は人なり」という言葉があり、創業者の方針を現在も引き継いでいるものです。園芸博の配慮事項にサステナビリティという言葉がありますが、その実現には資本となる人こそがサステナブルでなければならないと考えています。

これまではイベントに作品を出展する主な目的は、来場者に作品をみていただくことでした。今回の出展も当然、伝えたいものを表現した作品をみていただき



古積 昇 氏



中村 和晴 氏

沖縄県	鹿兒島県	宮崎県	大分県	熊本県	長崎県	佐賀県	福岡県	愛媛県	高知県	香川県	徳島県	山口県	島根県	鳥取県	広島県	岡山県	和歌山県	奈良県	兵庫県	京都府	滋賀県	福井県	三重県	愛知県	静岡県	岐阜県	石川県	富山県	新潟県	長野県	山梨県	神奈川県	東京都	千葉県	埼玉県	群馬県	栃木県	茨城県	福島県	山形県	秋田県	宮城県	岩手県	青森県	北海道	沖縄県	九州市
森根	間世	下湯	栗木	吉村	松田	村山	内山	高須	佐々	藤田	稲富	多々良	持田	西谷	福島	小林	的場	今西	入谷	奈須	高石	上田	南	水谷	中嶋	内山	中山	北郷	久郷	山崎	依田	岩井	成家	佐藤	渡邉	山田	増田	水庭	相良	今野	佐々	古積	佐藤	三浦	四宮	森根	藤田
清昭	吉宣	一弘	康一	昌洋	英明	剛優	賀盛	賀智	秀樹	俊広	健司	正樹	勝一	慶義	和義	盛州	康彰	芳郎	正典	正弘	誠	雅義	春海	和敏	晴芳	忠	総一	慎治	陽一郎	信幸	雅忠	彦彦	正幸	通明	博一	政博	久仁	創太	昇	康之	利吏	繁	清昭	良			

参加への期待と今後の展望を語る



GREEN × EXPO 2027 公式マスコットキャラクター トウンクトゥンク

ですが、みていただくのは空間に表現した作品だけではなく、作品づくりに関わる人のサステナビリティを築いていく取り組みもアピールしたいと考えています。

また、こうした出展に際し、これまでには限られたメンバーしか関わらなかったのですが、今回の出展では若手社員を中心に多くの人が関われるような仕組みを構築し、この経験によって次代を担う若手社員が成長することも期待しています。

司会 一通りお話しいただきましたが、今までの発言で、この辺をもう少しお聞きしたいことなどございますか。

和田 鈴木さんのビジネスチャンスという言葉はとても大事で、園芸博自体がビジネスチャンスを作るためのものです。

21世紀は環境の時代といわれながら、造園はメインストリームになり切れず、その一端を担っているに過ぎない状況です。今、生物多様性や well-being など、まさに私たちが仕事としていることにスポットライトが当たっていて、そういう中で「幸せを創る明日の風景」をテーマにした園芸博なので、幸せをつくるための努力をしなければなりません、過去の大きなイベントで苦い経験をされた方も少なくないでしょう。

園芸博が単なるお祭りで終わってしまったら何にもならない。そうではなく園芸博後に、私たちの仕事の価値がより多くの国民、世界の人たちに理解されているかどうか業界としての勝負です。

そういうところで実際に何ができるのか。その一つが日造協をはじめとする7団体で構成する造園・環境緑化産業振興会の出展でも検討され、暑熱対策やデータの蓄積等、みどりの持つ効用を多面的にアピールできればと考えています。

こうしたみどりの価値を発信して、来てくださる1千万人以上の方々に、そのための投資も必要だという理解を得ないと業界としては成り立ちません。ですから、ビジネスチャンスとしての側面もしっかり捉えて進めたいと思います。

鈴木 大きな造園会社は違うかもしれませんが、小さな会社で、参加したイベントが仕事につながるかどうかは会社を継

続する上で大問題です。

地元のイベントでもモデル庭園を出す業者は数社です。3日間の小さな庭の展示にお金も人も使えない。確かにそれも分かりますが、そんなことばかりいっていたら、市民の方がそうした庭園を見る機会がなくなり、将来につながらなくなってしまいます。元気のある会社や人が頑張って、提案をして、業界を引っ張っていくくらいの気持ちが必要だと思います。

司会 まさにそうやって出展する皆さんで、業界を引っ張っていただけたら素晴らしいです。

中村さんのお話で、今回は視点を変えとの話がありましたが、以前、チェルシーフラワーショウにも出展され、その辺りとの関係などもございますか。

中村 当社はチェルシーフラワーショウに2007年と2008年の2年連続で出展しました。

チェルシーフラワーショウで日本人初のゴールドメダルを受賞されたセイセイナーセリー代表の二宮孝嗣さんに社内セミナーで講義していただいたことをきっかけに二宮さんと共同で出展することになりました。会社としてはチェルシーでゴールドメダルを受賞し、そのステータスで国内の需要を取り込もうという営業目的がありました。結果は2年連続シルバーメダルで、ゴールドメダルを受賞するまで継続したかったのですが、リーマンショックの影響もあり、それきりになってしまいました。

国内でも緑化フェアやガーデンフェア等に出展して受賞した実績もありますが、そのことを営業に生かせるかというとなかなか難しかったりします。

そうした経緯もあって、今回は外部からの評価を得ることとは違った、作品づくりに関わる人をテーマにしています。



鈴木 元弘 氏



岩井 雅彦 氏

あるので心配しています。

また、山小屋風な家とデッキをつくり、川に橋をかけ渡れるようにするつもりですが、車椅子が通れるようにして、入口と出口は別にする必要があるとなると、かなりのスペースを取られてしまいます。

山を模したビオトープだといっても話は通らないので、出入り禁止にするしかないかなとも思っています。

岩井 去年からサカタのタネグループでも、いろんな部門から若手中心で園芸博のプロジェクトを設置して活動しております。

通常の仕事もありますが、園芸博に向けて坂田会長を中心に推進し、種苗会社、造園会社として、早く動いているのかなと思っています。

しかし、鈴木さんがおっしゃったように、いろいろ規制など、細かいチェックが相当入っているのも、それに準じた変更が必要です。半年間の維持管理が一番気になっているところです。

大阪・関西万博も最後のほうは樹木も大変な状況でしたがバビリオン中心でした。園芸博は、植物中心なので植物が主役です。

暑さに強い植物もありますが、亜熱帯化している本土の植生をどう取り扱うかなど、開催期間の半分以上が酷暑となる可能性があるのも、そこが本当に大きな課題であると考えております。

ただ、課題はあるものの園芸博から何か発信できると思っており、とても楽しみで、造園・園芸業界にとってチャンスだと思っています。

植物管理等のボランティアは博覧会協会で募集を開始すると聞いていますが、さまざまな植物が植えられている寒さと暑さの中での6か月間の育成管理は難易度が高いと思っておりますので、日本家庭園芸普及協会が認定しているグリーンアドバイザーの有資格者など、植物を熟知している方々にも参加していただき、一緒にやっていくような体制づくりが必要になるかもしれません。どういう組織で、どのようにコントロールするか課題もあります。

古積 当初は4区画(100㎡)くらいの話でしたが、話が進むにつれ、最終的に当初の6倍(600㎡)以上の施工面積となりました。かなり広い面積で、そこに東北をどう表現するか、また、東北の造園仲間と力を結集するための体制づくりが課題です。今後、植物の選定をはじめ、施工人員、開期中の管理体制、一番はそれらの事業資金の調達です。課題は山積みですが、とにかく前を向いて計画を進めて行こうと思っています。

仙台フェアで、神奈川(川崎市)の造園組合の皆さんとのつながりができたのでお手伝いをお願いできればと思っています。施工時もそうですが、半年間の維持管理を考えますと、地元の方々の協力が必要不可欠です。

司会 ビオトープは、造園会社ならどこでもできるものではないように思いますが、どんなところがポイントですか。

鈴木 例えば石組みでも日本庭園の経験者だと、綺麗に積みすぎちゃうことがあります。そんな石組みは自然にはないので、そういった考え方です。

ビオトープで汚れた手足を洗う水もすぐに排水とするのではなく、溜まってから流すようにすることで、バードバスにもなり、他の生きものも利用できます。ちょっとした休憩の石のベンチがあれば、トンボなどが濡れた羽根を乾かすのにも役立ちます。

石もちょっとした隙間をつくると、日中に暖められた石は夜もまだ温かさがあるので、それを好む生きものが棲みつく可能性があります。

すべて人の思うようにならないのが自然ですが、そういういい加減さが、いい加減になるのがビオトープです。

見た目の美しさ、景観をランドスケープとも言いますが、目に映る景色、情景だけではなく、その土地の風土、気候、文化、歴史、人々の生業、さらに人間以外の生物たちが棲める生息空間、それを全部一緒にしたものがドイツ語のランドシャフトで、人間以外が快適に暮らしていけないような空間は、人間もまた快適には暮らしてけないという概念、哲学みたいなものを最近教えてもらいました。

これまで設計図に1mmも違うものをつくれるのがいい技術者とされてきました。しかし、造園の現場、生きものが主体となる造園は、現場で自然と話をしながら、自然に教えてもらいながらいいものをつくっていく。それを発注者に提案できる技術者、そういう技術者がこれからはいい技術者だと思います。

ビオトープづくりの経験を重ねて、そういうことも分かってきました。

司会 支部としての取り組み方など、岩井さんいかがですか。

岩井 神奈川県支部では、まず、会員から出展希望を募り、都市緑化かわさきフェアの機運が続いていることもあり、川崎の方が手を挙げてくれました。園芸博会場とも近く、いい流れだと思っています。

また、神奈川愛といえますか、神奈川のこういうところをアピールしたいという会員の熱意をとても感じています。

設計段階なので細かい話はできませんが、神奈川は海、山、川、神社仏閣が多く、それらをテーマにしたいと思っているので、乞うご期待というところです。

司会 東北総支部はお祭りも挙げられていましたが、それは象徴的な表現ですか。

古積 その辺りはいろいろと考えましたが、できれば、実物を持ち込み、本場のお祭りの雰囲気味わっていただければと思っています。夜間の時間帯も開催予定とのことで、ライトアップすることで、よりお祭り気分になれるのではないかと考えています。大阪万博では、夜の来場者も多かったようですので、暑さを避けて夜の来場者も多いのではないかと考えています。

和田 皆さんの課題をお聞きしていまし

参加に向けた課題と挑戦

司会 だいぶ中身の話に入ってきましたので、人材、資金、情報発信の課題やそれを乗り越えるアイデアなどを、今度は中村さんからお願いします。

中村 今回の出展にあたり、関東地区のベテラン社員と若手社員に声をかけて社内でワーキンググループを立ち上げました。

普段は仕事に追われてしまい、社員同士が世代や部門を超えた技術的な交流の機会が少なかったことから、こうした機会を設けることで、お互いの知識や経験、意見を交換するきっかけになり、新たなつながりができると考えています。

もう一つ、今回初めての取り組みとして、2つの大学との共同出展というかたちを取りました。これには将来造園業に従事するかもしれない学生に作品づくりに関わっていただくことで、その魅力を

伝えられたらという思いがあります。

これから実施設計となりますが、事前に千葉県君津市にある圃場にモックアップをつくり、そこでブラッシュアップしたものを園芸博に出展します。学生にも設計から、施工、管理、撤去、移設の一連の流れを経験していただいて、その取り組みについては記録をして、何かしらの方法で発信していきたいと考えています。

鈴木 課題は維持管理です。寒い時につくって、開催期間が3月から9月までです。池とちょっとした小川のあるビオトープですから、当然そこには生きものがいます。8月ぐらいになると良くなっていますが、開催期間の維持管理や人員を含めどうしようか思案しています。また、ポンプを動かす電気や水が止まると困るので、いろいろ細かい容量や規制が

謹んで新年のご挨拶を 申し上げます		一般社団法人 日本造園建設業協会		会 長		副会長		専務理事		業務執行理事		理 事		近 陽 一 郎		古 積 昇		久 郷 慎 治		嘉 屋 幸 浩		金 清 典 広		荻 野 淳 司		小 川 巧		内 山 剛 敏		入 谷 芳 郎		有 路 信		山 田 拓 広		鈴 木 義 人		卯 之 原 昇		伊 藤 康 行		伊 藤 幸 男		正 本 大		井 内 優		和 田 新 也							
総支部長		監 事		北海道		東北		関東・信		北 陸		中 部		近 畿		中 国		四 国																																					
高須賀盛満		西谷 勝之		中島 祥之		中嶋 和敏		月山 光夫		高須賀盛満		関 正 義		執行 英利		佐々木創太		相良 政博		近 陽 一 郎		古 積 昇		久 郷 慎 治		嘉 屋 幸 浩		金 清 典 広		荻 野 淳 司		小 川 巧		内 山 剛 敏		入 谷 芳 郎		有 路 信		山 田 拓 広		鈴 木 義 人		卯 之 原 昇		伊 藤 康 行		伊 藤 幸 男		正 本 大		井 内 優		和 田 新 也	

たが、電力をはじめ、ユニバーサルデザインへの対応から動線の確保も厳しく、夢から現実といった話になると、課題は多くありますが、園芸博として、Well-Being や花と緑を掲げながら、暑くてダメでしたということにならないように、木陰の涼しさを体感、検証することができればと大きな樹木を配置できれば良いのですが、撤去の問題も有り、難しいということになってしまいました。

日差しを避けるためのテントという考え方もありますが、テントもそれ自体が逆に 40 度を超える熱源になってしまいテントの下でも涼しくありません。木陰

次世代継承
社会貢献...

展示を通じたメッセージ

司会 いろいろな話が出てきましたが、社会への貢献や次世代への継承、展示を通じたメッセージなど、参加を通じて果たしたい役割をお伺いできますか。

古積 東北の魅力を国内外に発信するとともに、その架け橋になりたいです。来場された方が、東北にぜひ行ってみたい、と思える空間を演出して、観光、文化、交流の起点となることを目指しています。

そして、未来を担う若い人が誇りと夢を持てる機会にしていきたいと思っています。

岩井 造園業界は、なり手不足が深刻な問題です。造園を学びながら業界に来てくれないことに危機感を感じているので、それを好転させる機会にしたいと思っています。

一方で、先日、令和 7 年の日本学校農業クラブ全国大会に参加いたしました、全国の農業・園芸高校生の思いもプレゼンテーションも大変素晴らしく、感動いたしました。農業・園芸高校の先生方も非常に熱心ですし、今回の園芸博において、将来を担う若い方々と共に、私たちが一緒になって何かを創り出して、将来に繋げたいと感じました。

鈴木 身近な自然がいかに重要かをお話しましたが、そういう拠点をたくさんつくりつなげて、いわゆる生態系ネットワークを社会に提案するとともに、毎年行っているビオトープフォーラムを横浜で開催し、フォーラムを通してマスコミ

園芸博を契機とした業界の展望

司会 園芸博を契機とした業界の展望についてのお考えを鈴木さんからお聞かせいただければと思います。

鈴木 繰り返しになりますが、今回の園芸博やビオトープを一つのビジネスチャンスと捉えています。

和田会長がおっしゃられたように、みどりの機能と効果は多大で、造園が取り扱える分野は間違いなく増えています。ただ、これをどう働きかけるかが確立されていません。

例えば、猛暑が続くと、少ししか樹木が植えられていない公園では、みどりの機能が生かせていない場合もあるので、公園や街なかのみどりを 10% 増やしたらどうなるかを考え、10% 運動の展開につなげることが、園芸博のさまざまな提案を根拠にできるかもしれません。

また、私たちはビオトープを提案しますが、造園の仕事の一部にすぎません。しかし、これをみた来場者が魅力を感じ、造園の仕事をしたいたいと思っていただけたら、その可能性は大きく広がります。

実際に造園の仕事のみて、他業種の方がこういう仕事がしたかったと入職したり、新卒の方もこんな仕事があることを知らなかったと入職した人もいます。

造園は社会に不可欠で、しかも魅力的な仕事なのですが、まだまだそれが知られていないことが一番の問題です。園芸博はそれを伝えるまたとない機会ですので、精一杯訴えていきたいと思っています。

は、葉の蒸散作用もあるので、28 度くらいにしかならず、圧倒的に涼しく、本当は木陰をたくさんつくって、みどりはいいねという声を聞きたいところです。

こうしたみどりは、美しいだけでなく、機能的にもすごいということを分かって欲しいのですが、どう分かっていただけるかが課題で、鈴木さんのビオトープで体感してもらえるといいですね。

モデルルートみたいなものをつくって、生物多様性はこのルートとか、それをつくるのは大変ですが、そういうものがあっていいと思います。

にも訴えていきたいと思っています。

また、地元にはいろいろな団体がありますが、予算を確保してもらって、視察してもらうことも考えています。

中村 造園業界で働きたいと思ってもらえるような魅力を発信したいです。就職活動をしている学生の話や聞くと、設計をしたいという人は結構多かったりします。しかし、施工をやりたいという人が少ないのが残念です。私たちがつくるものは、現場があってこそ、そのための設計なので、まずは造園が生み出しているものの素晴らしさを感じてもらい、そういうものをつくりたいと思っていただきたい。できれば子どもたちが将来のなりたい職業として、造園を挙げてくれるようになれば嬉しいですし、そこまでは難しくとも、造園に興味を持ってもらえるような取り組みをしたいと思っています。

和田 みどりの効用というか価値はあまりにも多様で、その一部の CO2 を取り上げると、都市のみどりでは規模が小さいと一蹴されてしまったりします。しかし、景観や木陰の涼しさ、メンタルケア、防災などを考えると、感覚ではなく現実的にその価値はものすごく大きく、園芸博では、こんなことも、あんなこともみどりの価値をしっかりと分かっていただける機会にしたいと思っています。

これだけの規模のイベントは滅多になく、海外でもこんなことしていると直接伝えられる機会でもあるので、海外出張にも期待しているところです。

岩井 鈴木さんがおっしゃったように、ビジネスチャンスとしてどう生かすかが私たちにとって一番大きな課題です。

そのきっかけが、ビオトープやグリーンインフラだったり、いろいろあると思います。提案の際に 1 社だけでは難しいので、日造協をはじめ、さまざまな関連団体とタッグを組んでやっていくのがいいと思っています。

そして、その取り組みや事例を蓄積して公開すると、発注者の方々がそれのみて、うちの学校に、公園にビオトープ、グリーンインフラをと採用してくれたら、仕事になれば、それを担える会社が増えます。園芸博をそういう好循環を生み出すきっかけにしたいと思っています。

中村 環境問題への関心の高まりにより造園業の需要も高まると思います。今より人手不足になると賃金が上がることが想定され、経営を考えると頭が痛いですが、造園業は他の業種に比べて賃金が高くないので、そのあたりも改善されるとよいと思います。

また、園芸博には海外からの来訪者が見込まれています。海外で認められるとステータスが上がるというところがあるので、そんなところにも期待しています。

日本の造園技術は世界に引けを取りませんし、これまで震災、震災など多くの災害から復興してきたことは何よりの実績です。こうしたものを海外にアピールすることで、日本に造園事業を頼みたいという需

要にもつながれば良いと思います。

古積 園芸博は、造園業界にとって“技術と地域資源を未来へ繋ぐ大きな転機”になると感じています。

私たちが長年培ってきた技術や、地域の自然・文化を国内外に発信できる場であり、若い世代にこの仕事の魅力を伝える絶好の機会でもあります。

また、園芸博をきっかけに、地域の緑地管理や観光と連動したプロジェクトが増えれば、造園の仕事は「つくる」だけでなく「育て、活かす」方向へ広がります。地元の企業や行政と連携しながら、持続可能な緑のまちづくりに貢献できる業界へと成長していければと思っています。

司会 都市緑地法の改正の話もありましたが、優良緑地確保計画認定制度（TSUNAG）の 3 つの課題は、気候変動対策、生物多様性の確保、Well-Being で、園芸博の課題と通じます。造園業としてこの 3 つにもっと積極的に関与できないかと思いますが、いかがですか。

岩井 私たちは造園業として仕事をしてきて、勿論、今後も続けていきますが、

造園業がメインストリームに

司会 大阪花博の後、ガーデニングブームがあり、造園業が賑やかだったような気がしますが、2027 年の園芸博後、環境ブームで造園業が賑やかになればいいなと思ったりします。ここからは自由にお話いただければと思います。

鈴木 和田会長のお話の通り、大企業は常に時代の先をみて動いています。

一昨年の環境白書だったと思いますが、生物多様性の取り組みの仕組みを経営理念の中に加えてくださいと企業に到達したことが書かれていました。

愛知県は、愛知万博や COP10 など、環境に対しての取り組みを先進的にしてきたこともあります。民間企業でもトヨタ自動車が 2015 年に「トヨタ環境チャレンジ 2050」を発表し、工場の緑地を再編、そこにビオトープをつくって、すべてをネットワーク化していくことも掲げています。

そして、これはトヨタ自動車だけにとどまらず、一次、二次メーカーにも波及します。環境対応は日本だけの問題ではなく世界の問題ですから、世界を視野に入れている企業の対応をみても、環境が単純にいいイメージだからではなく、ビジネスに欠かせないものであることが分かります。

岩井 トヨタさんなどのそうした発表には相当な裏付けがあり、一度打ち出したら、その取り組みを着実に進められると思います。そうしたものを担えるのは私たち造園で、知識と技術、そして経験が必要で、管理も不可欠です。

当社も日本ビオトープ協会の会員で、ビオトープの施工や管理をしています。図鑑と向きあって現場にいた在来昆虫を調べているスタッフもおり、既にそういうことも造園の仕事になっています。

園芸博の後の造園業というお話がありましたが、先程も言いましたが、造園が私たちのベースですが、環境ビジネスに携わっていることを、もっとアピールすると、それがビジネス拡大に繋がっていくと感じています。

司会 和田会長のところでもビオトープ事業はされていましたよね。

和田 よく話に出てくるのは東京・世田谷の二子玉川ライズで、視察の希望など民間の方々が注目していることが分かります。先ほども話しましたが、こういうものを私たちがいかに経済価値に置き換

範囲としては環境ビジネスに広げていく必要性も感じております。環境ビジネスであれば、3 つの課題に対応するのは当然ですし、仕事が環境ビジネスという範囲となれば、若い人も興味を示してくれると思います。

また、こうした課題に取り組む際の専門分野として、造園が法制化などによって認められると、社会の見方も私たち自身も役割が明確になると思います。

和田 環境関連の制度などに対し、デベロッパーをはじめ、多くの民間企業は相当敏感です。

成家広報部会長のところで施工された木場の工場跡地のビオトープにはカワセミが巣をつくり、その巣を襲うヘビまで生息している、そういった空間を民間企業が維持管理まで行っています。これに伴う価値、さらにいうと経済価値を企業が理解をしてお金をかける、投資をしています。

園芸博でこういうものを示して、その経済価値を証明できれば、もっとつくりたいという企業が出てくると思います。

えることが出来るか。学会等の論文も随分出ており、いろいろな機能、効果、経済効果に対する証明がなかなか社会的認知に至っていません。

古積 今後益々、環境への関心が高まり、造園が“流行”ではなく“地域に必要な産業”として定着していけばと思っています。

これからは、緑地づくりだけでなく、維持管理や防災、生態系回復など、社会課題の解決に造園の力が不可欠な時代です。そして何より、この未来をつくるのは若い世代の皆さんです。

造園は、地域のくらしを良くし、自然を次の世代に残していく、大きなやりがいのある仕事です。園芸博を追い風に、若い力がこの業界に加わり、一緒に新しい流れをつくっていけたらと思っています。

中村 国の認定制度の話がありましたが、当社の君津グリーンセンターが環境省の自然共生サイトに認定され、当社のお客様で環境省の自然共生サイトと国土交通省の TSUNAG の両方に認定されているところもあります。一方、これまであった緑の認定制度にメリットを感じられず、継続をやめたお客様もいます。様々な認定制度があるのはいいのですが、できれば一元化してお客様が申請しやすい制度になって、そこに経済価値が示されるとさらにいいと思います。

工場緑地の再編の話がありましたが、かつて当社が施工した工場の緩衝緑地で、植えられていた外来種を潜在自然植生種へ置き換える活動をしているところがあります。また、既存の緑地を活用して賑わいを創出しようとする取り組みを始めたところもあり、今後はそのようなビジネスも期待できると思います。

和田 中村さんがおっしゃられた「どう活用するか」は、これからものすごく大事になってきます。

造園業は、現在建設業であるとともにサービス業にもなっています。良い空間を創るだけでなく、いかにその空間を活用するか、どう演出し、利用してもらうかも大変重要になってきます。そして、環境ビジネスとしてのお話も出てきました。

そういったことをいろいろ試行できるのが園芸博でもあり、園芸博の中でさまざまなチャンスがあるのではないかと感じています。

司会 造園業がメインストリームに入っているって欲しいと思っています。そのためにも皆様の出展が大成功となるよう祈念いたしますとともに、造園業界全体で園芸博を盛り上げていければと思っています。本日はありがとうございました。